

第4回 万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けた ビジョン有識者ワーキンググループ 議事録（メモ）

- 日時 : 令和元年10月29日（火）10時～11時半
- 場所 : 大阪府庁本館3階 特別会議室（大）
- 出席者 : * 敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

<委員>

- 石川 智久（株式会社日本総合研究所調査部 マクロ経済研究センター所長）
- 嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 教授）
- 川竹 絢子（WAKAZO 執行代表）
- 高橋 朋幸（株式会社三菱総合研究所 西日本営業本部長兼万博推進室長）
- 野村 将揮（Aillis Inc. 執行役員 Chief Creative Officer、
World Economic Forum（ダボス会議）Global Shaper）
- 橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構 特別教授、
大阪府立大学 観光産業戦略研究所長）

- 事務局から資料4、5を説明。その後、各委員間での意見交換を実施。

《意見交換》

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。残り時間55分ぐらいございますので意見交換出来ればと思います。論点を二つに分けてご意見いただきたいと思います。

一つ目は「将来像の捉え方について」資料4、A4横のものをご覧いただきたいのですが、基本的な考え方等も含めて大きな方向性について、ご意見、議論をして参りたいと思います。大阪の特性や過去の万博、国際的な視点を踏まえた議論等も出来ればと思っております。

二つ目は「将来像本体の議論」になりまして、どのような言葉・キーワードがあり得るのかということに関しまして、具体的にご意見頂戴出来れば。特にA4の資料で申しますと、「将来像のキーワード」というあたりを定めて参りたいと思っております。

時間が限られているので、前半・後半分けて全体的なフレーミング及び基本的な考え方、主な視点等に関してまず議論いただいた後、20分程で切らしていただいて、後半キーワード等に関しましてご意見頂ければと思っております。

まず、将来像の捉え方・方向性、大きな枠組みに関しまして、ご意見ありましたらお願いいたします。

○石川委員

日本総研の石川でございます。非常に分かりやすい説明で資料も大変素晴らしくて、

非常にこれからの議論も楽しみに思っています。将来像の捉え方なんですけど、やはり私はこのワーキングに呼ばれた時に、橋爪先生から「世界を見て行く」というのがすごく納得感があって、2050年や2100年というような「長期と世界」というような、その捉え方はすごく大事かなと思っています。

先般、東京の横浜で「TICAD」というアフリカ開発会議に取材に行ったのですが、すごくアフリカも盛り上がっていて。やはり2050年ぐらいまではアフリカの人口も増えると。2025年ぐらいになって来ると、インドが中国の人口を抜くとか、アフリカの存在感が増すというので、多分、我々が万博をやる2025年というのはかなりインド洋を世界的にイメージされるかと。2025年というのは日本でまた「TICAD」等もあるので、ある意味では我々がイメージする世界というのはアメリカとアジアになってしまうのですが、そうではなくて、インド洋まで見て行くと。そういう意味で「アジアで輝く関西・大阪」、「世界で輝く大阪」というのをやはりイメージすると。

世界を見ることによって逆に東京に引きずられないのではないのかなと思うので、やはり世界で輝くという視点は、僕は大事だと思うし、今回のベンチマークで、コペンハーゲンとか世界の都市と比べるというのは大変良いし、非常にいい話かなと思っています。そういう意味では、将来像としては世界で輝くというそういう視点かと思っています。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。他、いかがでしょうか。

○川竹委員

ありがとうございます。資料4の「大阪の将来像」のところを見させていただいた時に、やはり一つ「Well-being」という人に関わるキーワードと、あと「Environment」という環境に関わるキーワードと、それらに拮抗する「Development」という3つのものがあると思ったのですが、それをいかに「三つ巴を一緒に押し進めて相反さないように前に進んで行くか」ということが、やはりこの将来像の中のキーかなと私は思いましたので、やはりその3つの軸を少し整理して行くと話がまとまりやすく進むのかなと思いました。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

○嘉名委員

大変、膨大な資料が出てきたなという印象。今までの議論を逆にデータから辿っていただいたということで、大変ありがたいと思います。

今日の議論でということ言うと、キーワードはもちろん、色んな整理の仕方があるのだが、何となく私自身の理解だと、「変わるものと変わらないもの」みたいな整理が

一つあると思います。「人中心」とか、「ヒューマン」とか、「ウエルネス」とか、この辺のキーワードというのは、これからテクノロジーがいくら発展しようとも人間であるからには変わらない。「原点回帰」と言うか、そういうキーワードがしっかり出てきている。

今までは、「文明が発展して技術が発展して変わって行く」ということを予想するような先追い先追いというストーリーがあったのだと思うのですが、「ここでしっかり原点回帰しましょう」みたいなのが、やはり大事ではないかというのが一つ大きな話かなというふうに思っています。

それから「変わるもの」については、これまでも議論が散々されてきていて、「なかなかやはり先を見通せない」ということだが、予測不可能なことに對して、しなやかに対応出来るということ、そして、少なくとも分かってる変化のようなものには対応する。

それから、「クリエイティブ」や「イノベティブ」というキーワードが出てるが、人が知恵みたいなもので解決して行く、そういう生き様スタンスが現れてるのかなという気がします。なので、そういう「変わるもの」「変わらないもの」という話で整理して行くというのもあるかと思う。

私がたまたま今週末からコペンハーゲンに行くのですが、コペンハーゲンのことを調べていると、やっぱりもう彼らは今、気候変動のことで頭がいっぱいで。やはり「環境」というキーワードはあるかも知れないが、都市計画で公園をつくるのだからって気候変動の為にやってるとか、そういう感じになっていて、少し地球全体の未来みたいな話もあってもいいかなという気はいたしました。以上です。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。先々週までコペンハーゲンとデンマーク第二の都市オーフスへ、リビングラボの視察に出向いておりました。オーフスは、平均年齢 28 歳の 30 万都市。世界で最も若者の人口の割合が多い、大学を中心に発展したまちです。

リビングラボの概念は北欧発で世界に広がった。気候変動に対する問題意識に加えて、北欧独自の民主主義をベースに、市民が話し合いを行なう伝統がある。同様に大切なのは、新たな発想をそのまま受け入れることではなくて、それに大阪らしさを加味していかないといけないと思っております。

「変わるものと変わらないもの」というご指摘はその通りですが、それは歴史観に関わって来るので、何をもち「変わらないもの」とするのかという見方と判断基準が重要だと考えます。あと、変わる方向性も含めて、検証が必要。どのように私たちは変わるのか、方向性をよく考えなければいけない。これは歴史観に基づきます。要は、進歩史観、発展史観なのか、あるいは何かのより上位の価値判断に基づいて、時代の変化を把握するといった姿勢なのか。北欧のように、調和と言うか、気候変動を重視するような「変わらないもの」があるとの見方もある。いっぽうで経済成長に拠って立つ「変

るもの」と「変わらないもの」もある。どういう立ち位置で、どのような大局観をもって、我々が何を持って「変わるもの」と「変わらないもの」にするか議論が必要だと思っています。

○高橋委員

資料は、歴史や都市論とか入られて、すごくいいなと思いました。加えて「大阪らしさ」ということを考える上では、府域の地域構造みたいなものも、もう少し捉えてもいいのではないかと思います。

今、「集中から分散の流れ」というのが世界的にも起こってますし、「多様性」などと言われているので、それぞれの特色を出して行くことで、総合力として府域が生きていくのではないかと考えています。

その中で、例えば、大阪市内ですと、これまで「北と南」という構造でしたが、今後、「夢洲」と「大阪京橋・森之宮」あたりが動いてきたりしますので、「東西軸」という考え方が結構出て来るかなと。そうすると「南北」と「東西」で、それが更にマトリックスになっていき、大阪というエリアがすごく多様性が出て来るのかなという、少し構造的な考え方もあるかと思いました。

あとは、資料の 55 ページで「文化創造活動を東京に集める」というのがあったと思いますが、おっしゃる通りだと思います。都心に大学がないというのもそうなのですが、文化の何か大きな拠点、そちらに大阪城がありますが、そのあたりの何かそういったものが入って来るということも必要かなと。

今回、夢洲で万博と IR と、実は東西に大きなものが出来ますので、そこに更に真ん中で劇場とか充実して、あと、どこかで大学ですね。色々と構想されているとは思いますが、そういったものが出て来ると東西軸ってすごい文化の軸で、南北は割とエンターテインメントとか、ある意味歴史的なものであってということで、何か多様性が出て来るのではないかとということを論点として考えました。

○橋爪委員（座長）

東西軸だと近鉄沿線にも大学が多くある。

○高橋委員

そうですね。延ばすと。

○橋爪委員（座長）

東西軸は、大阪市内に留まらない。近畿大学、大阪商業大学など。

○高橋委員

元気な大学が多いですね。

○橋爪委員（座長）

北河内にも多くの大学があり、学生は多い。工場等規制法のため、大阪市内から郊外に大学は移った。学研都市もあるので東西軸は、府下も含めて知の集積というものを考えればなと思います。

では、野村さん。

○野村委員

この資料は大変興味深く拝読しました。少しだけ問題提起をしたいのですが、「誰に何を伝えたくて、言語化したいのか」というのは、一つに限る必要はないと思うのですが、きちんと固めておいた方がいいかなと思います。

例えば、嘉名委員や石川委員のお話にはとても同意でして、世界に対して代替不可能な「大阪らしさ」みたいな、アイデンティティ、キャラクター、ポジショニングと言った事柄をきちんと伝えるに当たって、資料中の「ヒューマン都市」、「ウェルネス都市」、「ユニークネス都市」、「クリエイティブ都市」といったものは、僕の地元の富山もめざすし、ニューヨークもめざすし、パリもめざす、いわば一般論に近いものなんですよ。

○橋爪委員（座長）

一回りご意見頂戴しましたが、私からも4点ほど申し上げます。

一点目は、「万博のインパクトは何か」という点です。今日原案では、十分に整理されていない。例えば、「万博のインパクトを活かす」ということが前提ですので、「万博のインパクトというのはどういうことだ」ということを仮置きして、それをどう伸ばすのかということを考えていくことが必要。その時に先程、嘉名先生おっしゃったように、何を継続するかといった視点が必要。

そのうえで、万博のインパクトを活かすために、これから2025年までに準備することと、同時に2050年のあるべき姿を想定して、それに向けてインパクトを活かすというシナリオが必要。ですから、時系列でビジョンを描く際に、少なくとも、「万博のインパクトは何ぞや」ということをきっちり想定しないといけない。そこがきちんと定められないと、その前も後も、説明が難しくなる。

そこにあっていくつかの考え方があろう。例えば、野村さんがおっしゃったように一つは「対外的に、世界に対して、我々は何が、どのようなインパクトを万博で示すのか」ということと、対して「府民・市民・国内に向けてどんなインパクトをもたらすのか」という点も重要。今日示していただいている「持続的な成長」「豊かなくらし」「世界に貢献」というキーワードがあります。なにより明らかなことは2025年の段階で「国際化」が大きく進展するということだと私は考えています。これは内なる国際化と、対外的な国際化の双方があり、世界から大阪が注目される都市になることがインパクトとなる。

あと、持続可能な都市のモデル、あるいは Society5.0 の実装、さらにはバーチャル・サイバーフィジカルを融合したような都市のモデルを我々は 2025 年で示すと強調している。新しい都市のモデルを示すことがインパクトになる。それを世界に向けて発信し、また国内の人々の暮らしの質を高める契機にしなければいけない。いずれにせよ、2025 年に向けてなすべきことと、それによって 2050 年に向けてすべきことというこの二段階のビジョンを描くことが出来るというふうに思います。これが一点。

二点目は、今回のビジョンは、明るい未来と言うか、生き生きとした都市とか、元気のある大阪という理想を置くことを確認しておきたいということ。未来には幅があるが、未来の描き方は何パターンかしかない。一つは楽観的なシナリオ。もう一つは途中で何らかのインパクトがあって、少し問題があるけど、それを解決する、課題解決型のシナリオ。もう一つは悲観的な、最も問題があるケースを想定して、そうならないように我々が何をするのかというシナリオの描き方。今回、我々は、楽観的な可能性を示すようなシナリオを描くということであろうと考えています。

三点目としては、「質的な転換と量的な転換」の双方に関して我々は考えなければいけないということ。私の理解では 2025 年までは都市論で言うと、再都市化の時代。これまでの高度成長の時代・工業化の時代に作られた都市を、もう一度、今の時代に応じた都市に組み替えている段階である。その次の段階で我々は、質的な転換を図らなければいけない。一方で量的な回復をしなければいけない点もある。たとえば 20 世紀後半に大学が都心から郊外に移ったが、それを都心にどれだけ戻すのか、と言うのが量的な問題。いっぽうで、新たな時代を拓く都市型の大学は、従来型の大学ではないだろうというのも正論だと思う。新しい大学をつくらなければいけない。これが質的な話。

先程、高橋さんがおっしゃったようなインフラに関して、広域計画で考えてきたもの。これまで人口増加に応じて、道路をつくり、鉄道を整備し、住宅地を拡大してきたが、それを量的にどう考えてゆくのかがいっぽうで重要。ただし同時に従来のインフラを、新しい次世代型のインフラに、クオリティーを変えていかななくてはならない。質的な変換も求められている。

最近、昭和 24 年に大阪府が示した産業復興五ヶ年計画などの資料を読みこんでいるんですけども、戦後復興の時は、ベンチマークを二つ置いた。一つは昭和 5 年頃。当時の工業生産額に戻すというのが量的な数値目標。もう一つは質的なことを考えて、昭和 5 年の大阪は軽工業中心で、昭和 15 年は重工業にシフトした。この経緯をふまえて、これからの戦後復興の大阪は、その両方を備えるような工業都市をめざすと掲げた。質的な目標がベースにあり、泉北のコンビナート誘致につながる。これは高度経済成長に向けて人口が増えている時の計画だが、人口減少期を迎えても、やはり、量的な目標と質的な観点の両方が必要。

我々も、これから人口減少が進むなかで、量的な目標と、同時に質的な転換の議論をすべての領域で行う必要がある。そのなかで量的な目標では、とりあえず失われたものをどの水準まで取り戻すのかというところが、大事な視点になるのではないかと。従来

は足し算だったが、ピークアウトしたものをどこまで戻すのか、失ったものをどの水準にまで回復するのかという話になると思います。

四つ目としては、将来の都市の語り方で、新しい概念が必要であるということ。今日の提案には「人間にフォーカス」という言葉があります。この言葉でいいとかどうかご意見もあるかと思いますが、「人中心の社会」という考え方があるだろう。これには、自動車を優先、経済成長を優先といった、従来の社会への反発が含まれている。「技術と人の共生」というのも、言葉がこれでいいのかは分かりませんが大事な視点であると思います。あと「住みやすい」「イノベティブ」「統合」「若者が集まる」などの言葉がある。言葉の選定は今後、詰めないといけませんが、言葉がこれでいいのかはさておき、いずれも視点としては良い。

抜け落ちているのは、自然と都市との新しい関係の在り方とか、地球環境への配慮といった視点でしょうか。大阪の特徴の一つは、1時間も郊外に行くと、すぐ近郊の山にわけいり、また大阪湾から淡路島などに到達する。大阪平野全体を考えると、三方を山に囲まれ、一方を海に面している。その平野部分は、ほぼ全て連坦した市街地になっているというのが特徴だと思います。自然との関係など、何か新しい概念を援用するか、新たに発明しなければいけないと思います。持続可能性を考える上でも、そういう視点も必要であろうと思いますね。

ということで、まだ色々お考えあろうかと思いますが、時間が限られておりますので、先に進めさせてください。では、二つ目の論点です。申し上げました資料4、A4の資料で申しますと、「将来像のキーワード」というところで、今、「先端技術と人が共生する社会」というのが全体を取りまとめる言葉になっております。その下に5つの柱が書かれていますのでございます。このあたり、またお考えあればと思っています。

野村委員がキーワードを考えて来ていただいているということですので、ここは、まず口火を切っていただけると幸いです。

○野村委員

ということで、「大阪の将来像を見据えて万博のイメージを言葉にしてみた」という資料をお持ちいたしました。先立って、大阪府の方とお話させていただいて、お力添えをと思い準備してまいりましたものです。

1枚目。”Expand Humanity”。さすがに格好付け過ぎているので、ちょっとダメですよ。これは僕が4秒で考えたものですが。「人間性の拡張」というのは、イノベティブだし、色んな含蓄がある、かつ、ヒューマニティーという言葉は人文系の響きを纏っており、現在の資本主義の更にその先といったところを想起させる意味でも面白い。しかしながら、これは多くの人に伝わりにくい、わかりにくいからダメだなあと。

さて、今日の議論でもございましたように、2050年にも残っているであろう「大阪らしさ」という観点から、その象徴とは何なのかということを考えてまいりました。事務局より配布いただきました197ページの資料の32ページにまさに記載のありましたよ

うに、大阪のイメージは、「にぎわいのある楽しいまち」。ほか、132 ページにありましたが、「都市発展モデル」。これらが今から僕が提唱する仮説にぴったりハマります。

ということで、「大阪の強さは大阪のおばちゃんにある説」です。

大阪のおばちゃんはやっぱりすごいです。関係構築能力がとて高くて、自ら文化を牽引し、ともすれば図々しいとも思われるかもしれないのですが、たくましいし、無垢だし、生命エネルギーもあるしというのがあっていいのではないかと。

次のスライド。「大阪のおばちゃんが言いそうなこと」を野村調べで書き綴ってみました。「おもろいことしてや」とか、「ええやん、もう人それぞれでもいいやん。図々しく生きればいいやん。」とか、「ないもんは作ればあれやし、なかったらなんとかあれしたらいいやん」みたいなノリですとか、「失敗は成功の種や知らんけど」みたいな感じのことを言いそうなイメージがあるわけです。愉快・楽しさとか、無邪気さ・前向きさ・個性、個性がそれぞれ強いからこそその寛容さ、そこから新しいものが生まれてくるというところかと思えます。

これまでの話をキャッチコピーというか短い言葉に落とし込んでみました。「世界一わんぱくな都市 大阪」。大阪、「Amusing City」ですね。「amusement」の amuse を現在進行形で形容詞化したものです。「楽しませる」という意味ですが、シンプルに「楽しい」「愉快的」といったイメージをお持ちいただければいいかと思えます。大阪は言わずもがな、お笑い・エンタメに加え、気質としても前向きさや無邪気さ・予測不可能・個性豊かであると。これは多様性と軌を一にしていますし、楽しさ・Well-being といったものも広く含まれるであろうと思えます。

「世界一わんぱくな都市大阪」というと、幾分か軽い感じがするのですが、万博のロゴなんかと嵌めてみると、こちらのように、結構おさまりがいいのです。「わんぱくな万博」「amusing creations」。我ながら英語の方は気に入っていて、新しい価値をつくるというのは、本来的には楽しいことであるはずだし、想像力を超えて行くし、その過程で人が一層尊重されて行くみたいな含蓄があるはずだろうと。

世界中から「大阪がどんな都市ですか」という問いを投げかけられたとしたならば、その答の一つに「amusing」があり得るだろうと。本当は「わんぱく」という言葉を英直訳すると「playful」などになるのですが、ちょっと難しいんですよ。逆に言えば、「amusing な都市だ」と名乗れる大阪以上のところは、世界にないのではないかなと思えました。

ちなみに、英語部分を少し変えてみて、「unexpectedable」、つまり、想像出来ない、そんな楽しさがある。「アミューズメント」とか、もっと長くて語呂が悪いのですが、「amusement beyond imagination」ですとか。想像力を超えた先で新たな発見や出会いがあって楽しみがあるみたいな議論もあり得るのかなと。

いずれにしても、amusing というワードとしてかなり嵌まるのではないかと思い、お持ちいたしました。以上です。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。

○橋爪委員（座長）

いかがでしょうか。まずは「わんぱくな万博へ」感想でも。どうぞ。

○石川委員

面白いなと思って聞きました。なんか大阪のおばちゃんという話をした時に大阪のおばちゃんって非常にいいのですけれど、大阪って大阪のおばちゃんもいれば、大阪のおばちゃんじゃない人もいて、真面目な人も結構いたりして、あまり大阪のおばちゃんが全面的に出過ぎるのは「ちょっとあれかな」と思ったのですが、その大阪のおばちゃんのテイストを残しつつ、明るい意味で「わんぱく」というのはすごくいいかなと、何かイノベーションが生まれそうな雰囲気があって、何かベンチャー企業とかが集まりそうな雰囲気になる言葉なので「わんぱく」というのはいいかなと思います。

あと、「アミューズメント」という言葉も面白いなと思ってまして。似たような話を色んな所でやった時に例えば大阪の元気さを表す言葉、「パーティーシティとかどうだ」という話があった時に、海外では結構、パーティーシティというのがあるのですよね。ニューヨークとかでも。でも、ちょっと軽いなという話もちょっとあって。「パーティーシティ」と言うと本当にパーティーして、もう刹那的に終わるようなイメージがあって。「それに代わる言葉は何なのだろうか」と思った時に、「アミューズメントクリエイション」みたいな言葉というのは「面白いな」と思っています。

そういう意味ではパーティーほど軽くない、明るい言葉みたいな、寛容性があるみたいな、大阪の良さは寛容性だと思いますので、そういう寛容性がある新しい物がどんどん生まれてきて、それでいてちょっとかっこいいみたいな言葉があればいいかなという意味で、その中で「わんぱく」とか、「アミューズメント」、「アミューズメント」って面白いなと思いました。

○野村委員

どうもありがとうございます。「わんぱく」って、やはり日本特有の考え方というか、思想ではあるので「世界一「WAMPAKU」な都市である」と言ってしまう方がいいとも思うのです。一応自分なりに相当数の案も考えてみたのですが、creativeとかWell-beingとかいった言葉が溢れている世界において、「WAMPAKU」という概念を世界に打ち出していく、その端緒であり中核であるというのはすごくいいなと思って。

○橋爪委員（座長）

ここから外れてもらっても。どうぞ。

○高橋委員

昭和の時代は「わんぱく」という言葉はあった気がするので、非常に前の万博との繋がりもある、すごい深い言葉だなと。語呂も合っていますし、すごくいいなと思いました。

個人的には副題の方も別に日本語でいいのかなと思います。外に出す時には別に英語で良いですが、予測不可能な楽しさみたいなのを前面に出すと、これからいろんな企業からアイデアのパビリオン等、いろんなものが出てくると思います。そこでやる予測不可能なもので、なお且つ「楽しいものをやろうよ」という何か共通のものが出てくると、すごく良くて、それがレガシーになっていくと、このポスト万博のビジョンにも繋がるなと思って、非常に素晴らしいなと思いました。

○野村委員

恐れ入ります。

○橋爪委員（座長）

2050 年は予測不可能だと言い切ってしまう感がありますね。

○高橋委員

楽しさがついてくるのが大事です。あるいは元気とかもでもいいです。

○嘉名委員

「わんぱく」の方は皆さんおっしゃる通りでいいのですが、ちょっと後ろの「万博へ」というのが気になって、万博がゴールみたいな感じがあるので、万博までにやることもあるし、万博以降、万博を契機により大阪がみたいな話を、どう万博と結び付けるのか。万博という言葉はまさに人間の原点と言うか、好奇心と言うか、そういうところを指していると思うので、そういうものが原動力になって都市が変わっていくみたいな事としては、非常に共感できます。

○橋爪委員（座長）

「わんぱく」は大阪弁と違うのではないかな。大阪弁だと「ごんたくれ」になるのかな。「ごんた」はそもそも浄瑠璃に出て来る主人公に由来する。後は「やんちゃ」とかでも。私も「アミュージングクリエイションズ」は非常にいいなと。昔から大阪のあり方を一言で言うと、ポジティブに考えて、面白いという。笑いではなくて、他の人と如何に違うアイデアを持ち、従来の枠組みから外れてアイデアがある人のことをユニークネスのことを、面白いと。私の師匠の植田先生は「面白い都市」と言う、私が大学にいた時に、そういう「面白い都市」を研究する。これはユニークネスを求めたのですが、それと絡めて「アミュージングクリエイションズ」、そして「パーティーシティ」も捨て難

いけど、日本語になかなかならない。

○石川委員

そうなのです。軽くなってしまうのです。日本語だと。

英語だったら、もう少しいい感じの表現だと思うのですけれど。

○橋爪委員（座長）

多くの人が集まる街やというイメージが重要。

○石川委員

「パーティーシティ」って、結構僕は合っていると思うのですが、これが変に一人歩きするのが怖いという感じで。そういう意味で、「アミュージングクリエイションズ」は面白いなと。あと、今、橋爪先生がおっしゃったみたいに、関西に7、8年住んで「おもしろい」という言葉は、ものすごく幅がある言葉だと思うのです。でも、東京だと大阪の人が「おもしろい」と言った瞬間に、一面的になってしまうので、そう意味で「おもしろい」という言葉を使うと、すごく大阪出身が東京で使うのはすごく緊張するのですが、そう意味で大分怖さを言葉がきれいにしているなと。

○橋爪委員（座長）

そのほかに、キーワードがあればお願いします。

○川竹委員

あの、面白いなと思ったのですけれど、聞いて考えたのが大阪のおばちゃんとか30代以上の人はわくわくするのですけれど、やはり大阪って今、女子高生とか若い女の子が梅田はタピオカを持っていたりとか、都市部というのは意外とそういう人がブームを作っていて、「女子高生とか女子大生が飛びつくかな」というのをずっと考えていて。

「いいかな」と思った時に、私達よく、何か褒め言葉として「最近ファンキーだね」とか、「やんちゃだね」とか、すごい橋爪先生がおっしゃった言葉を使ったり、一方で「わんぱくだな」という言葉には惹かれるかなと、色々考えていたのですが、ただ「ファンキー」という言葉もスライドとして出しているのかというのは。

○野村委員

英語表現として、ファンキーはあまり望ましくないかなと思います。

○川竹委員

ちょっと、良くないなと思いましたし、何かそうするとやはりこれはすごく面白いのかなと思ったのですけれども、若い人もわくわくするような視点をもう少し入れられるか

なということ、今、ちょっとずっと考えていまして、何かもっとポップな感じとか出せるかもしれないと、あともう少し考えれば。ちょっとまだ思いついていないですが。

○野村委員

ちなみに、これを作るときにすごく留意したのは、性別世代関係なく理解が出来る言葉かという点でした。「わんぱく」は、小学生にも伝わる。たとえば「ファンキー」だと40歳以上には伝わりにくいかなど。他方で、「わんぱく」という単語自体はまさに、昭和とか平成前期の単語ではあるわけですが、だからこそ70年万博との接続もあるかなと思っておりました。

このキャッチコピーを何かにそのまま採用いただきたいという趣旨ではなく、個人としてごめんなさい。議論の材料になれば嬉しいです。

○高橋委員

全然話題が変わってしまうのですが、先ほどの言われたキーワードで「自然」とか「環境」的なキーワードが今、無いかなというところを思っています。これもまた大阪市になってしまうかもしれないですが、大阪って淀川と共に歩んできた、共に生きてきたというところがあるかなと。それイコール自然災害とかそういうものと戦ってきた、あるいは共生してきたというようなところがあって、そういった、今回、歴史とか、もちろん結構入っているので、そういった観点で何かキーワードを入れられたらなと思っています。キーワード自体を未だ思い付かないですけど。やはり自然との共生みたいなのは都市でありつつ、でもそれと共に歩んできた都市でもあるので、何か入れないといけないのかなと思いました。

○橋爪委員（座長）

万博で掲げたコークリエーション、すなわち共創という概念はさまざまに展開できる。技術と人が共生という割とスタティックな感じがします。「アミュージング」の「ing」が大事だと私は思います。共生というよりは、共創という表現をうまく使うのが良い。たとえば「自然との共生」というとよく使われますが、「自然との共創」と書くと、新しいイメージが湧く。

たとえば誰もが淀川は自然の景物だと言いますが、新淀川は明らかに人工の大放水路。それが百年経つと、構築物のなかに、保存すべき自然がおのずと生まれてくる。そういうのが大阪らしくということかもしれない。新しい自然を、我々は常に創ってきたという発想が重要。

「緑が少ないから増やしましょう」とか、というふうな語り方になるのですが、我々は人の手の加わった自然を生み出し、調和した社会をこれまでも創ってきている。今後も新たな「自然との共創」という考え方があるかなと思います。

また石川委員がおっしゃった「世界に輝く」に関しても、「世界と輝く」という発想も可能。両方あると思うのですが。

○石川委員

何となく大阪ってすごく寛容的なところがあるので、「世界と」なのかなと思うのですが、けれども、「世界に」でもあるかもしれないです。他の方にちょっとお聞きしたい。

○橋爪委員（座長）

原案では、「世界に貢献」になっている。明らかに大阪と世界を別ものに扱ってまずけれども、それでいいのかどうか。世界の中の一員として世界と共に輝くというのが、貢献しているということになると思います。世界の中であって、他の地域とともに光輝いているという発想が重要。ただし輝くとはどういうことかも別の課題かと。

○高橋委員

万博のレガシーということであれば、「世界と貢献」の方がいいのかなという気はします。今回の万博、実現出来るのか分からないですけど、80億人だったか、人が参加するというような考え方もあったので、万博後ということでは「世界と」の方が印象的かなと思います。

「世界」が何を表しているかにもよると思います。国を表しているのか、じゃなくて別にもっと何か文化的な世界もあるし、宗教的な世界もあるし、民族的の世界もあるし。

○橋爪委員（座長）

世界中の人々と共に大阪の未来を開くのだというニュアンスだと私は思いました。

○高橋委員

世界も。リアルとバーチャルがありますし。

○橋爪委員（座長）

2025年の万博では、サイバーとフィジカルの融合をイメージしている。世界という言葉を使う時は、サイバーとフィジカル、双方の世界を考えないといけない。現実の世界と共に我々は将来を開いていくし、サイバー世界を通じて世界にアクセスする。

○野村委員

議論をしていて気がついたのですが、大阪という都市空間が2050年ですとか、それ以降ですとか「こうなるぜ」若しくは「こうあり続けるぜ」というふうな表明のレベルと、これからの未来の理想はこうだよ、ということが混在しているようです。後者は議論の余地があまり無いというか、この基本的な考え方が10個になっても20個になっ

でも1個になっても、「そうだよね」で議論が完結してしまうなあと。将来像のキーワードにある「ヒューマン都市」、「ウエルネス都市」、「クリエイティブ都市」といった言葉は間違っているわけでもないし、悪いわけでもないのですけれど、世界に対してインパクトがあるかとか、大阪らしいかとかは、議論が必要なのだろうと。

まとめますと、資料の左上の部分は「そうだよね」というところであまり議論の余地が無く、悪い意味ではなくいのですが、それでは「大阪の将来像はどういう都市なのか」「大阪とは何なのか」という議論に戻ってくるのかなという気もしました。

○橋爪委員（座長）

世界のなかの位置付けをまず整理した上で、「大阪らしさ」を加味することが必要。この分野やこの領域にあって突き抜けることで、世界の中で存在感を示すという発想が不可欠。「アミュージング・クレイエーションズ」が1つあるとして、そのほかにも、3つ、5つの柱となる概念があって良い。他とは違う大阪の将来像が必要。基本的な考え方にあって、普遍的な世界の都市がめざしている部分の整理と、それはそれとしてだけど大阪だからこういう方向性があるだろうという、双方の基軸がなくてはいけない。

○川竹委員

私としては今回の万博はすごく「パビリオン」から「ラボ」への転換をいかにするかところがやはりすごく大事だなと思って。その為には、何か私達の団体もずっと「パビリオン」という言葉を使っていたのですが、今回の万博をきっかけにいっそ全て「パビリオン」という言葉を廃止してしまって、代わりに「ラボ」という概念を万博に植え付けると、すごく何か今回の万博はいいのかなと思って。ライフサイエンスや研究の分野で言うと「ラボ」になりますし、アートで言うと「アトリエ」という言葉もあると思うんですけど、それをこの5年間で都市として「ラボ」というキーワードをすごく大事にするとか、何か世界の人に関わって、市民も関わってということに繋がるのかなというのをかなり思っています。キーワードに一回「ラボ」という言葉を大事に入れられるということが、今回の万博の鍵ではないのかなというふうに思います。

それが5年間でちゃんとみんなが関わって、その関わった成果が万博という中まで体感出来るという事が、すごい万博を大阪でやる意味なのかなと思います。

○嘉名委員

この百年ぐらいで大阪は200万の人口がいま800万になって、それがまた減ろうとしていて、大阪市も江戸時代は30万人ぐらいだったのが、いま270万人になって異常な増え方をして、これから急激に減ることになるのですよね。

その時に、大阪の将来像というのをポンと置いた時に何となく更地から作っているような感じがどうしてもあって、更地ではなくて、資料ではものすごく地層が積み重ねてきた上で今があって将来があるということなのだけれど、そのストーリーみたいなも

のが少しキーワードに入ってくるといいのかなと、さっきからずっと考えてはいるのですが。もうキーワードとしては例えば再編集とか再構築とか、再とかそういう言葉を使うのかなと思ってみたりしたのですが、じゃあ今、置かれている現状から更にみたいな時に更地感が出ると、軽くなるというのですかね。

それが実は、ある状況からある状況に変えていくみたいなことの難しさとか大変さみたいなものをまさに「やんちゃ」な精神で解決していくみたいな、そういうニュアンスが出るというのかなと、ちょっと思っています。

○石川委員

確かに歴史が長い地域なので、やはりそういう蓄積がある言葉があるといいのかなと思いつながら聞いていました。ちょっと具体例は思いつかないのですが。先ほど、川竹委員の話の中で、「ラボ」という言葉は確かにリビングラボという言葉が、やはりうちの会社も「インスティテューション」というのが、「ジャパンリサーチインスティテューション」、「インスティテューション」とはすごく堅苦しいのです。それに比べて「ラボ」はすごい柔らかいし、また「アトリエ」とかですね、そういうのがたくさんあるというのは共創的な感じのかなと。まあ「アトリエ」とか「ラボ」とか、コ・ワーキングプレイスはちょっとわかりづらいかな。例えばワークショップとか、そういったのがどんどんたくさんあるようなのがいいのかなとちょっと思いました。

○橋爪委員（座長）

将来像を描く場合に、ベクトルを含む場合がある。たとえば「工業化社会」という概念がある。工業社会じゃなくて「工業化社会」。情報社会じゃなくて「情報化社会」、「情報化社会」の先に「高度情報化社会」がある。これらの場合は、工業化、情報化の「化」が過去形になっている。英語で言うと「～ライゼーション」の「ライズ」というのが入ってくるような概念。未来の方向性を語るために「化」を用いているが、時制によっては達成したという意味合いでも用いられる。さらにそこから転換する時は「脱工業化」などと方向性を重ねる。また単に時間的に継続するという場合には「ポスト」という言葉を用いる。たとえば「ポスト工業化社会」。あるいは「再」という言葉も用いられる。

「再都市化」は、「Re-urbanization(リ - アバナイゼーション)」。従来のベクトルに対して違う方向性を意識して、そこからまた動き出すというイメージである。またまったく新しく作り直す場合は「新」を用いる。戦後、大阪駅に対して「新大阪駅」が、これから発展する郊外に置かれた。機能を刷新する意味合いもあって、戦後復興期には「新しい大阪」という概念が用いられた。

日本の言葉の限界があって、小さく新しい機能を置く場合、我々は「新」を使い、密度を高める時は「高度」を使い、面的かつ量的な拡大の時は「大」を使う。「大」は同じ質のものを面的に、あるいは量的に拡大すること。丁度パリが「グラン・パリ」のプロジェクトを進めている。従来の都心部の課題解決の為に郊外に新たな機能を点在させる

というビジョンになる。従来のベクトルから逃げる時は「脱」を使い、一旦荒廃したものをもう一度復興する時は「再」を使う。今、私たちがどのフェーズにいるのかちょっと考えないといけない。私としては、構造転換の時期に今あるので、再編成の段階だと思っている。大阪は「Re-urbanization(リ - アバナイゼーション)」の段階にある。

○野村委員

ちなみに、今の議論を踏まえて、自分で落とした案をいくつか御紹介をすると、一つ目が全部英語なのですが、「transforming diversity」、多様性そのものが転換を続けていくという。多様性の概念自体も変わっていくし、広がっていくし、多様な人がもっともっと多様になっていく。「transforming」という言葉がちょっと一般の人に刺さりにくいかと思って使わなかったのですが。

次が川竹委員の話に近いのですが、「amusing challenge」とか、「amusing challenge field」というのを考えもしました。ただちょっとエッジが弱いなど。

最後が、ちょっとギャグっぽいのですが、「viral innovation」。感染的にガーンと広がっていくような感じで、イノベーションが次のイノベーションへと連鎖を生んで広がっていくイメージです。「viral」が言葉として必ずしもいい印象ではないので多削りしました。

○橋爪委員（座長）

「バイラル」に代わる良い表現があれば良いのですが。

○野村委員

そうなのです。本当は英語で「diffusing」という言葉があるのですが、何かと分かりにくいなど。

○橋爪委員（座長）

要は、転換する・再編する、拡散する・拡大する、何らかの小さなシーズが広がっていくというイメージを肯定的に示す。万博のインパクトをどう広めていくのかという、意味や価値を付加しつつ、拡張する方法論のイメージかと。

○野村委員

それでやはり、「expand humanity」という最初にご紹介した案に行き着いたのです。ちょっと気取り過ぎというのはお話ししましたとおりです。

○橋爪委員（座長）

「エクスパンド」というのは、さっき言った枠組みでいうと「大」になります。取りまとめる段階で、また参考にさせていただければ幸いです。

また次回、今日の意見も整理をしながら最終の取りまとめに向けて精査していただければと思います。では、進行をお返しいたします。

(以上)